

【会員の頁】

小沢丈夫会員 ICTAC Award 受賞

千葉工業大学の小沢丈夫先生が第12回国際熱測定会議 (ICTAC-12)においてTA Instruments - ICTAC Awardを受賞された。わが国の熱分析の第一人者である先生の、永年にわたる研究および学会活動に関する多くの優れた業績について与えられたものであり、熱測定学会

会員の一人として、また電子技術総合研究所時代に指導を受けた者の一人として心からお慶び申し上げます。

先生の研究業績については、「小沢プロット」を始めとする熱分析の速度論に関する理論研究がよく知られている。小沢プロットは、反応率をパラメータとし絶対温度の逆数と昇温速度の対数のプロットから活性化エネルギーを求めるもので、単純な手法ながら汎用性の高い方法であり、よく用いられている。理論研究のほか、それらの手法を絶縁材料、蓄熱材料等、様々な材料に適用し、その有用性を示されたことも重要な業績であろう。

電総研でエネルギー貯蔵研究室長をされていた頃の室長室は、狭い部屋の中にご自身の机とソファ、秘書の机、室員が議論するための机、いくつかの書棚、コピー機、そして当時としては珍しかった英文と和文のワープロが、整然と配置されていた。それと引き換え先生の上には常に多くの資料が雑然と山積みされていたことを思い出す。先生の頭の中はどうなっているのだろうかと思うほど、いろいろな仕事を同時にこなされていた。熱測定関係者は先生の専門が熱分析と信じて疑わない(実際そうである)が、エネルギー関係者の中では先生は電池や燃料電池、蓄熱の専門家であった。手掛けられたレドックスフロー電池は、現在200 kWプラントが実証運転の段階にある。電総研からダイセルに移られる直前に酸化物高温超伝導体の発見があった。このときはいち早く熱分析を新しい材料に適用し、不定比性や製造プロセスに関する研究を進められた。時代の要請に合った研究課題の的確な設定の裏には情報収集と独特の勘があったように思う。

先生はこれまで国内外の学会で様々な貢献をされた。熱測定学会会長を勤められたのを始め、熱測定応用研究グループの設立や熱物性学会とのジョイントミーティング開催に重要な役割を果たされた。ICTACでは、標準化、用語、教育、速度論の各委員会委員を勤められ、会長の重責も担われた。

これまでもメトラ賞、クルナコフメダル等、多くの



受賞歴があるが、いずれも学術業績とともに国際的な学会への貢献が認められたものと思う。昨年第4回を迎えた日中熱測定シンポジウムには、第1回から日本側の窓口の一人として関与され、その発展を支えてこられた。小沢先生の国際性は横浜育ちという環境により培われ、たびたび出席された国際会議等でその感覚をさらに磨かれたものと思う。長期の海外滞在経験は持っておられないのに、流暢な英語を話される。電総研時代は、宴会で興に乗るとイスラエルの民謡を大声で歌われることがしばしばあった。

筆者は1996年に先生の65歳を祝ってThermochim. Acta誌の特集号をJ. H. Flynn博士、J. Šesták博士とともに編集させて頂いた(Thermochim. Acta 282/283 (1996))。このとき先生の代表論文リストをとりまとめたのであるが、その後も先生の研究活動は盛んで、いまだに論文が増え続けている。温度変調DSCの登場でいっそう熱分析の理論を深められているように思う。今回の受賞講演はTemperature control modes in thermal analysisと題するもので、IUPACのPure and Applied Chemistryに掲載されることになっている。

学生の頃小沢先生の総説を読み論理の明快さに感じ入った覚えがあるが、その後、様々な立場でずいぶんいろいろなことを教えて頂いた。先生が熱測定学会にとって、熱測定の将来展望や学会運営のことなどでいつも貴重な発言をされる頼りになる存在であると思っているのは私だけではないだろう。これからもますます元気で御活躍されることを願いつつ、お祝いの言葉としたい。

(電子技術総合研究所 神本正行)